

過去と正面から向き合い、その事実を次の世代へ

2019年

第五次・村山談話を継承する平和の旅



撫順・平頂山惨案跡遺骨館で慰霊の献花をする（2019年11月2日）

第五次・報告書 目次

- 報告書発行にあたって／鹿倉 泰祐 2p
侵華日軍第731部隊罪証陳列館を訪問／飯沼 秀雄 3p
平頂山惨案（撫順）・柳条湖事件（瀋陽）跡を訪ねる／鹿倉 泰祐 7p
河北・三光作戦遺跡（潘家戴庄惨案・潘家峪惨案）を訪ねて／楠本 昭夫 10p
中国社会科学院近代史研究所との意見交換／飯沼 秀雄 14p

添付

- 村山内閣総理大臣談話 1p
●旅の行程 18p

資料

村山内閣総理大臣談話

「戦後50周年の終戦記念日にあたって」（いわゆる村山談話）

（平成7年8月15日）

先の大戦が終わりを告げてから、50年の歳月が流れました。今、あらためて、あの戦争によって犠牲となられた内外の多くの人々に思いを馳せるとき、万感胸に迫るものがあります。

敗戦後、日本は、あの焼け野原から、幾多の困難を乗り越えて、今日の平和と繁栄を築いてまいりました。このことは私たちの誇りであり、そのために注がれた国民の皆様1人1人の英知とたゆみない努力に、私は心から敬意の念を表わすものであります。ここに至るまで、米国をはじめ、世界の国々から寄せられた支援と協力に対し、あらためて深甚な謝意を表明いたします。また、アジア太平洋近隣諸国、米国、さらには欧州諸国との間に今日のような友好関係を築き上げるに至ったことを、心から喜びたいと思います。

平和で豊かな日本となった今日、私たちはややもすればこの平和の尊さ、有難さを忘れがちになります。私たちは過去のあやまちを2度と繰り返すことのないよう、戦争の悲惨さを若い世代に語り伝えていかなければなりません。とくに近隣諸国の人々と手を携えて、アジア太平洋地域ひいては世界の平和を確かなものとしていくためには、なによりも、これらの諸国との間に深い理解と信頼にもとづいた関係を培っていくことが不可欠と考えます。政府は、この考えにもとづき、特に近現代における日本と近隣アジア諸国との関係にかかわる歴史研究を支援し、各国との交流の飛躍的な拡大をはかるために、この2つを柱とした平和友好交流事業を展開しておりま

す。また、現在取り組んでいる戦後処理問題についても、わが国とこれらの国々との信頼関係を一層強化するため、私は、ひき続き誠実に対応してまいります。

いま、戦後50周年の節目に当たり、われわれが銘記すべきことは、来し方を訪ねて歴史の教訓に学び、未来を望んで、人類社会の平和と繁栄への道を誤らないことでもあります。

わが国は、遠くない過去の一時期、国策を誤り、戦争への道を歩んで国民を存亡の危機に陥れ、植民地支配と侵略によって、多くの国々、とりわけアジア諸国の人々に対して多大の損害と苦痛を与えました。私は、未来に誤り無からしめんとするが故に、疑うべくもないこの歴史の事実を謙虚に受け止め、ここにあらためて痛切な反省の意を表し、心からのお詫びの気持ちを表明いたします。また、この歴史がもたらした内外すべての犠牲者に深い哀悼の念を捧げます。

敗戦の日から50周年を迎えた今日、わが国は、深い反省に立ち、独善的なナショナリズムを排し、責任ある国際社会の一員として国際協調を促進し、それを通じて、平和の理念と民主主義とを押し広めていかなければなりません。同時に、わが国は、唯一の被爆国としての体験を踏まえて、核兵器の究極の廃絶を目指し、核不拡散体制の強化など、国際的な軍縮を積極的に推進していくことが肝要であります。これこそ、過去に対するつぐないとなり、犠牲となられた方々の御霊を鎮めるゆえんとなると、私は信じております。

「杖るは信に如くは莫し」と申します。この記念すべき時に当たり、信義を施政の根幹とすることを内外に表明し、私の誓いの言葉といたします。

（出典 外務省ホームページより）

侵略戦争の歴史を平和の旅で知る

鷹倉 泰祐

731部隊などによる加害の歴史

2014年に社民党の吉田忠智党首（当時）が訪中して交流を深めたことを契機に、社民党と国際友好文化センター（IFCC）の共催で翌年から「村山談話を継承する平和の旅」が実施され、今年で5回目を迎えました。

「2019年第5次 村山談話を継承する平和の旅」は、4名の参加で10月31日～11月5日まで、ハルビン、撫順、瀋陽、唐山、北京を訪問しました。

ハルビンでは、731細菌部隊罪証陳列館の内外の施設を見学し、被害者の家族である張さんの証言を伺い、撫順では、平頂山事件の跡地にある平頂山惨案記念館と撫順炭鉱を見学し、唐山では河北省の三光作戦跡である潘家戴庄惨案記念館と潘家峪惨案記念館を見学、北京では、社会科学院での意見交換及び中華全国青年連合会への表敬訪問、日中戦争の発端となった盧溝橋や天安門広場などを見学しました。

今回の平和の旅で感じたことは、頭の中で歴史を学ぶことだけでなく、現地を訪れ犠牲者の方々の生活や人生に思いを寄せるといこと、現地の方々の説明や一人ひとりの気持ちを聞くことが本当に大事だということです。

日中両国民の協力と平和

私達4人は、犠牲者が眠るそれぞれの記念館や跡地に、日本の仲間から預かった千羽鶴を捧げてきました。犠牲者の方々の写真や名前、遺骨や遺品は、それぞれの場所に数多く展示されていました。名前や写真を見ているとその人たちの生きざまを感じ取ることができます。その犠牲者の方々に哀悼の意を捧げていると、自然と深い悲しみが訪れてきました。日本軍による無謀な侵略戦争によって無残な死を遂げ、家族とも引き裂かれた方々の無念な思いが伝わってくるようでした。

また、731部隊罪証陳列館や各地の虐殺現場の記念館には、数多くの日本軍の兵士の証言や記録、残っていた兵器や日本の文字が書かれた装備などが展示され、侵略の歴史が刻まれていました。

二度と不幸な侵略戦争や植民地支配を起こさないためにも、これらの展示物は、日本の多くの国民が見るべきものです。私達は、この平和の旅で平和の尊さを改めて心に刻むことができましたし、この平和の旅の経験を日本の多くの皆さんに伝えることが

大事だと考えています。これからも日中両国民が共に協力し、平和運動や戦争反対、核兵器廃絶の運動に各地域で取り組む必要があります。

若い世代へ村山談話を継承する

今年は、戦後74年となりました

が、隣国である中国と日本の関係改善は進んでいません。

安倍首相は、戦後70年の「首相談話」を閣議決定しましたが、「侵略」や「植民地支配」は言葉としてはありますが、日本の過去の行為に対する歴史認識としては第三者的に使ったにすぎません。「痛切な反省とお詫び」も歴代内閣が繰り返し表明してきた、と事実を紹介しただけでした。

村山談話は、「内外すべての犠牲者」に深い哀悼の念を捧げるとし、多くの国々、特にアジア諸国の人々に対してだけでなく、「国策を誤り、戦争への道を歩んで国民を存亡の危機に陥れ」たことへの反省は、憲法前文の「政府の行為によって再び戦争の惨禍が起ることのないようにすることを決意」したことを国際社会に訴えたものです。

私たちは、戦後74年のこの年を、「新たな戦前」としないよう、過去と正面から向き合い、その事実を若い世代にも語り伝え、武力によらない平和な未来を切り拓いていかなければならないと考えています。

これからも平和憲法を守り、唯一の被爆国としての体験を踏まえて、核兵器の究極の廃絶を目指し、核不拡散体制の強化など、日本の若い世代とともに推進していくことこそが過去への償いであり、隣国である中国の犠牲者への誓いだと考えます。

なお、この村山談話は、残念ながら現在の首相官邸のホームページには掲載されていませんが、外務省のホームページには掲載されているので、ぜひご覧になってください。

（NPO 法人東京福祉・まちづくりネット代表理事）



潘家峪惨案慰霊碑の前で

再び戦争と戦争状態にならない様にと固く誓う

飯沼 秀雄

731 部隊と三里塚・芝山空港反対同盟

中国北東部の中心都市哈爾濱（ハルピン）の郊外の平房地区に広大な敷地の中に記念館と保存された廃墟のような施設が整備・保存されており、正式名称は「侵華日軍第 731 部隊罪証陳列館」という。

731 部隊は「関東軍防疫給水部本部」が正式名称です。通称、石井部隊と言われていました。

訪問団の報告書分担を決める際に私は 731 部隊と希望した。理由は単純で 731 部隊の最高責任者の石井四郎という人物が同じ郷土の千葉 山武郡 芝山町（加茂）出身ということで、興味がありました。生い立ちは地主 兼 酒造家である石井桂の四男として生まれ名門千葉中学（現・千葉県立千葉中学校・高等学校）、第四高等学校（金沢市）を経て、1920 年（大正 9 年）3 月、京都帝国大学医学部を卒業という経歴から気になっていたためです。

また 731 部隊については森村誠一氏の『悪魔の飽食』を読んだことがあり多少の知識もありました。

芝山町加茂は成田空港の南側に隣接する地域で、成田市三里塚と隣接した地域です。三里塚・芝山空港反対同盟で知られた地域です。731 部隊は地元の芝山町加茂の出身者が多く、731 部隊は当初加茂部隊と言われたこともあったと言われています。

この地域は反対同盟の中心地で戦後 731 部隊の蛮行を反省謝罪して、日中交流平和運動に参加し、後に反対同盟の幹部となり、社会党に入党した方もいたと古参党員から、731 部隊訪問をしたと会話したときに秘話を提供されました。

また、石井中将は私の父親と同年でもありました。父親は貧農の次男として生まれ、二度、招集を受け中国に戦争に行ったと話していました。最初が北京周辺で二度目は上海だったと言っていたように記憶しています。

子供のころ中国で撮影された写真が大量にありましたが、日中国交回復のころに焼却してしまいました。その理由ははまだ判りません。

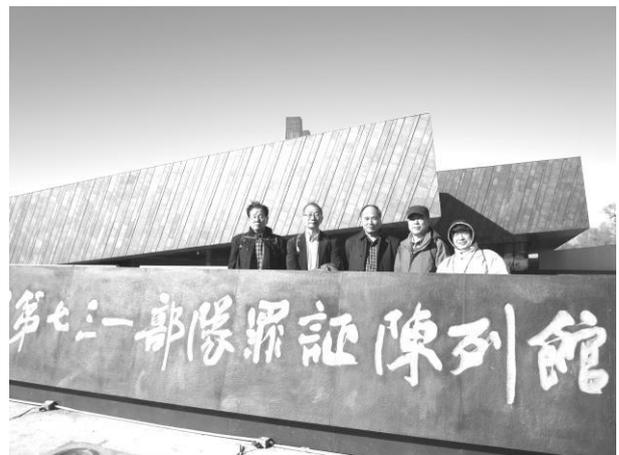
石井四郎は 1928 年から 30 年に欧米へ行き、細菌戦の情報を収集し、軍に細菌戦の必要性を提唱しました。

——その理由の第一は「欧米各国は既に細菌戦の研究を行っている、日本が準備を怠っていれば戦争

になった時に大変な事になる。

第二に日本は金属鋳物等の資源が乏しいため、新たな兵器開発が必要であり細菌兵器はその一つである。

第三に砲弾等の通常兵器と比べ細菌兵器の殺傷範囲は非常に大きい。また、感染から長時間殺傷能



力を保持することができるため、戦略的意義から非常に有効な兵器である一。

以上のような主張を軍の支持を得て陸軍軍医学校防疫研究室が創設され、関東軍が占領していた中国東北部が研究しやすいと移転したものです。

1936 年天皇の勅令で日本は中国東北部哈爾濱第 731 部隊を中心に細菌戦部隊を組織させ、各師団に防疫と衛生部隊を作らせました。非軍事医療機関としては京都帝国大学、東京帝国大学、満州国医科大学などは 731 部隊と協力して人体実験や細菌研究をしていました。九州大学では米軍捕虜を使って生体解剖実験を行っていました。



石井四郎は日本国内に積極的に細菌戦を推奨し、日本軍に影響のある軍事科学者小泉親彦に協力を求め、1932年東京陸軍軍医学院細菌研究室を創設し防疫研究室を設立して研究を始めました。

日本軍は1932年中国東北部を占領し、その後、中村四郎の細菌戦研究のため広大な敷地を提供したのです。日本軍本部は哈爾濱の平房地区に細菌実験基地を作ることを決定しました。関東軍司令部は特別軍事施設区域として指定し、身分証明書の無いものは出入り禁止でした。

侵華日軍第731部隊罪証陳列館を訪問して

1) 731部隊本部

主要区域は敷地面積6.1平方キロ（東西南北2.5キロ四方）の広大な敷地に80数棟の建築物を同時代最高の技術を使い建設された。

・暖房給湯送電システムの完備

3階建の鉄筋コンクリートのボイラー室で給水、暖房、電力を供給していた。

・建築デザインの特徴

口号棟に囲まれた特別監獄があり、人体実験対象者「マルタ」を収容していた。

・鉄道専用線

敷地内には鉄道が敷設されています。731部隊敷地には現在も4階建てアパートと工場がありその間に鉄道が通っていますが使用されているかどうか不明です。鉄道は専用線で平房駅まで4キロある。

・施設の生活区

731部隊は約3000人の居住区と生活区が建設されており、運動場やプールがありました。

・731部隊の組織機構

本部、細菌研究部、細菌実験部など8部あり、他に研究室と野外実験室がありました。部隊は将官3人、佐官44人、技官102人とともに下士官、兵隊、軍属で合計3540人がいました。医師・博士号は約50名でウイルス学、生物学の当時は世界のトップクラスの京都帝国大学、東京帝国大学出の専門家でした。

・細菌戦の養成訓練

石井四郎は故郷千葉県芝山町で後継者を育てるため14歳～17歳の少年隊員を募集しました。時代が異なれば三里塚・芝山空港公園反対同盟少年隊に参加していたかもしれません。

・人体実験

731部隊の最も重大な犯罪行為が人体実験です。細菌戦を実行するためペスト菌、炭疽菌、チフス菌、パ

ラチウス菌やコレラ菌等の細菌を人体で実験しました。元隊員の田村良雄氏が細菌培養、山内豊紀氏はペスト菌とチフス菌の効果実験を証言しています。

・ねずみの飼育



プールのような場所を1メートル四方で区分したところで実験用ねずみを飼育していた場所が保存されています。目的はノミの繁殖です。石井四郎部隊長の兄、石井三男が獣医大学を卒業し、厚遇で配置されていました。1945年8月敗戦が濃厚になると一足早く、動物飼育室を焼却して帰国しました。

・人体実験

731部隊の細菌効力実験は効力の猛毒細菌を作り出すことです。そのための実験を行って効力の強い毒性の細菌を作り出す研究をしていました。

その方法は、筋肉注射、口から細菌、皮下注入をしました。生体実験は菌を投与後の内臓変化を観察することでした。これは、病理研究班長だった石川太刀雄氏の証言です。胡桃沢正邦氏は人体解剖技師で、妊娠中の女性を解剖したと告白しています。実験した死体は焼却しました。

・野外実験

野外実験の主なものは飛行機で細菌を散布することです。日本軍の装備を付けさせ、野外の柱に人体実験する人間を柱に縛り付けて手足のみ露出させて実験をしました。

・凍傷実験

日本軍が寒冷地での戦闘作戦する準備の為の実験を行いました。凍傷室を作り実験しました。

・毒ガス実験

毒ガス生産と毒ガス貯蔵室、実験室を作り「マルタ（人間）」を使い毒ガスの効果を研究していました。

・人体実験をされた人々

日本の関東軍憲兵隊



司令部の規定で「取り扱い特別移送基準」を決めていました。ほとんどは中国人で他にソ連人、モンゴル人、朝鮮人も含まれ、棟内の特別刑務所に収監されていました。

・細菌戦の開発

湯たんぼのような陶器製細菌爆弾を作り、目的地にペスト菌のノミを入れて投下しました。

・細菌戦の実行

1938年731部隊はノモハン戦役（モンゴル国境付近でのソ連軍との戦争）で初めて細菌兵器を使用しました。関東軍の命令で、砲弾で発射する、飛行機で爆弾として落とす、水源地に細菌を撒く、など3つの作戦でした。この作戦は石井四郎部隊長が現地で直接指揮しました。

細菌散布はハルハ河でも実践されました。当時、ソ連軍は給水システムがあったので細菌の感染は受けずに済みましたが、日本軍兵士が飲料水としたため1404人が感染しました。この戦争で日本軍は大敗しますが日本軍司令部は細菌兵器が有効な手段であると判断し施設を増強しました。

2) 敗戦に伴う731部隊の行方

施設展示物の最後は731部隊の滅亡、証拠隠滅、戦後関連問題です。8月10日731部隊は撤退を決め、①資料を焼却する②施設を爆破破壊する③捕らえた捕虜（マルタ）を殺害し処理するとし収監していた約400人を毒ガスで殺して焼却しました。

731部隊は撤退に際し①731部隊の身分を明かさない②すべての公職についてはいけない③部隊間の通信連絡を禁止する、という証拠隠滅を図りました。

731部隊は8月13日に石井部隊長等のトップは重要な資料を持参して航空機で帰国し、その他の731部隊は関東軍が特別列車をしたて8月17日に帰国しています。関東軍で部隊が全員、帰国できたのは731部隊だけでした。

「戦犯」を逃れた理由

アメリカは731部隊のデータを確認するため、日本の細菌戦研究を調べ密かに石井四郎部隊長や25名について調査し尋問してアメリカは細菌実験、細菌戦のデータを確認しました。これらの資料を確認したアメリカは安全保障の観点から石井四郎とその部下を戦争裁判から免除しました。

元731部隊員の反省と証言

一部の常識ある人は自分の経験を語り加害者としての証言を反省しました。

- ・石橋直方氏は刑務所の管理し生体実験を見ていたことを証言し謝罪書提出しました。
- ・胡桃沢正邦氏は人体解剖技師であり、手術道具を提供して証言しました。
- ・越定男氏は石井部隊長の運転手で捕虜（マルタ）

を運搬していたことを証言しています。

- ・鈴木進氏は運送担当で死体を川に投棄した所を訪ね謝罪しました。
- ・沖島袈裟春氏は細菌を積み込む絵を描き事態を証言しました。
- ・神谷実氏は石井四郎部隊長の「厳密」の命令に従い証言しませんでしたでしたが最後に息子の神谷則明氏が公表し写真を提供しました。
- ・田村義明氏は少年班で人体解剖を証言しました。
- ・松本正一氏は飛行機で細菌を中国各地に散布したことを証言しました。
- ・三尾豊氏は国際情報組織担当の中国人を移送したことを証言しました。

証言と反省をした元隊員たちは交流会を組織して訪中し謝罪を続けてきました。

戦後に被害が広がる（証言聴取から）

731部隊被害者の証言は戦後の悲劇です。張作君（83歳）さんの配偶者靖福和は九死に一生を得て生き延びることができた方です。今回は高齢の張さんと付き添いで娘さん靖淑霞の証言です。

——張さんの証言

夫の靖福和さんは哈爾濱郊外の平房区に住んでいた。場所は731部隊施設から4キロ離れた後二溝屯という村に住んでいた。戦後、ペストにより夫の村と周辺の村で100人くらいの村人が死亡するという事態が発生し張さん家族も19名中12名が死亡したそうです。

731部隊施設は終戦の少し前の8月10日に爆発し煙が見えましたが何をしている施設であるか近隣の村人は知らされていませんでした。その後の1946年夏ころペストで多数が死亡しました。

張さんの夫の父と母と子供らが5日のうちに亡くなり、叔母さんも相次いで原因不明で亡くなりました。多分ペストで死亡した弟の葬儀に参加し感染したのだと思います。弟の妻、子供二人もペストで死亡しました。話をすると当時を思い出し悲しくなり話すことが辛いです——

（話すことが困難になり証言を娘の靖淑霞さんに代



証言者・張作君さん（左から3人目）と娘・靖淑霞さん（左から4人目）

わる)

——叔母さんが亡くなり死体を安置する場もなく草むらに置きました。叔母は水が飲めない、首が腫れて全身に疱疹ができて痛くて座っても寝ても駄目でした。症状の出ていない人も不安でなにをしたらよいのか分かりませんでした。

叔母は苦痛で叫び声をあげながら亡くなっていきましました。亡くなくても目が開いたままでした。馬車が牛車で運び埋葬しましたがその帰り道に感染する者がでました。

叔父さんは叔母の次になくなり黒い血液を吐いて一瞬で死亡しました。19名の家族のうち3週間で12名が死亡しました。

父は12歳でした。ノミ、鼠が感染媒体だと証言しています。父は73歳で亡くなった。母より3歳上であった。感染しませんでしたが生涯、病気がちで健康が優れませんでした。

父のその後の回想では父の弟が他人の埋葬を手伝って帰ってきてから感染が判明したとのこと。残された家族7人は貧困のどん底に落ちた感じで、心理的に大きな打撃を受けました。父のおばあさんは毎日、墓の処で泣いて最後には目も見えなくなりました。

父の経験を忘れず、後世に伝えています。そうすれば、父もあの世で慰められると思います。生き残った者が事実を証言し歴史を忘れないようしたいです。父は731部隊の非道を伝えるために陳列館の金館長と日本に3度訪問しました——

訪問団からの質問

(生活はどの様にされていましたか?)

——生活は農業で高粱、大豆、トウモロコシを生産していました——

(ペストであることを知ったのは何時ですか?)



——この事件後の1946年9月13日3つの村で急死する人が増えてきましたので9月16日人民政府から専門の医者がサンプルを取りに来て、9月19日に政府がペスト菌と判定しました。政府は消防隊を村まで派遣してきて除染をやりました。9月24日哈爾濱の大きな病院、人民病院からお医者さん、機材もっている専門の人たちが村に派遣されてきました。村で色々な防疫作業を行いました。

戦後まで731部隊があった施設はどのような目的の施設か全く判らなかったです。村の住人は731部隊の施設で働いていた人いないでした。

戦後、村人は勝手に村外に出ることを禁じられ、菌を持った人と周囲から差別を受けました——

以上、731部隊の実情を報告し二度と再び戦争と戦争状態にならない様にと固く誓いました。日々、安倍政権と右派勢力は民族主義と排外主義を宣伝しマスコミを支配し影響力を強化していることが懸念されますが老骨にムチうち戦争反対・改憲阻止に奮闘したいと思います。

(松戸労組会議副議長)

被爆者の方らが折ってくださった千羽鶴を持参

鹿倉 泰祐

母から流れ落ちた血が、私の体を伝わった 平頂山惨案記念館（撫順市）

撫順市は遼寧省北部にあり、瀋陽市からの距離は約 45km、市内には溪谷のように巨大な露天掘り炭鉱（撫順炭鉱）が現在も残されています。撫順市の炭鉱産業は斜陽で、瀋陽市などの巨大都市との経済格差が感じられました。

私達は、瀋陽市から車で撫順市に向かいました。途上で見る景色は高層住宅を中心とする都市開発が特徴です。私は、中国対応の WIFI（日本からレンタル）で、Google マップで移動中の中国の地図を見ながら、沿道の施設や建物、目的地などを確認していました。

中国の現地ガイドの方は、昔は Google マップは中国でも利用できたと説明もありましたが、日本人が Weibo（微博 中国で Twitter と Facebook の代わりに使用）をスマホで使ってくれば連絡が楽になるから利用して欲しいなどの提案もありました。長時間のドライブでしたが、中国の様々な状況について説明を聞きました。

撫順炭鉱は瀋陽の東に位置し、その鉱区は東西 17 キロ、南北 44 キロ、面積 6000 万平方メートル。露天掘りと坑内掘りの両方があった。撫順炭鉱はもともと 1901 年に中国人により開発され、日露戦争勃発後、中東鉄道用石炭採掘のためロシア軍に占領され、日露戦争後は日露講和条約に基づき日本に引き継がれ、南満洲鉄道株式会社とその経営に当たったとのこと（日本の国立公文書館の資料による）。

車から降りた私達は、秋の涼しい空気を浴びながら、遠くが少しかすんでいる露天掘りの広大な炭鉱を上から見学したのち、平頂山惨案記念館に移動しました。

平頂山事件の概要

平頂山事件を“事件”として一般の日本人に知らしめたのは 1970 年代初めに朝日新聞の本多勝一記者が書いたルポです。

その事件は後述する柳条湖事件の翌年に起こりました。1932 年 9 月、中国東北部の撫順の炭鉱街の近

郊にある平頂山という集落で、中国人老若男女約 3000 名を、日本の軍隊と警察官、憲兵隊らが虐殺し、遺体を埋めたという事件です。この現場から奇跡的に生き残った被害者たち（中国では「幸存者」）3 名を原告として、日本政府に対して損害賠償請求訴訟を 1996 年に起こしたのが、「平頂山事件訴訟」です。地裁と二審の東京高裁は賠償を棄却しましたが、虐殺の事実とは認定しました。この判決は 06 年に最高裁で確定（敗訴）しました。

この最高裁の判断について、研究者として裁判で証人も務めた駿河台大学の井上久士教授（中国近現代史）は「南京事件など、その後の残虐行為の原点というべき事件」と指摘。当時の政府は事件を隠し、関係者も処分しませんでした。しかし、「処罰していれば、その後の歯止めになりえた」「日本は不都合な歴史も直視するべきだ。加害を認めることで、原爆など日本の被害も世界に伝わるのではないか」と述べています（東京新聞 2015 年 10 月 1 日）。

東京新聞の記事（下記アドレス）には、「ぼたぼたと母から流れ落ちた血が、私の体を伝わった」（生存者・楊宝山さん）の証言や、原告 3 名の紹介、事件の背景説明などが詳しく説明されています。

<https://www.tokyo-np.co.jp/hold/2015/Postwar70th/toinaosu/list/pdf/p151001.pdf>



遺骨館に持参したオリヅルを献納

撫順・平頂山惨案記念館

記念館は巨大で展示品は膨大です。入り口には、1900 年代の初頭からの日露戦争から平頂山事件までの説明文があり、日本人や外国人に対しては「日本の中国侵略についての本当の歴史を理解していた

だきたい。われわれは歴史を鑑とし、未来へ向かい、世界の恒久平和と繁栄への努力をしよう。」とその趣旨が記述されています。

撫順炭鉱の説明では、「撫順炭鉱占領は1945年の日本降伏まで続き、石炭産出量はおよそ2億トン」



「鉱山事故が頻発し、10万人以上の炭鉱労働者が負傷し、1万人に近い労働者が死亡」と、当時の被害状況が示されています。私達は、平頂山事件と日中戦争の歴史、日本での平頂山事件の訴訟、発掘された人骨などの展示を見学し、見学の最後

後に「第5次村山談話を継承する平和の旅」の花輪を献花し、日本からの千羽鶴を捧げてきました。

撫順平頂山惨案纪念馆のパンフレットには日本語での説明があります。その説明文を要約します。(以下要約)

——日本帝国主義が、撫順炭鉱の採掘権を奪い、他の工業資源を奪い始めた。1932年9月15日深夜、遼寧民衆自営軍は撫順炭鉱を占領していた日本人を襲撃。日本侵略軍は自衛軍が通過した平頂山の付近の村民をスパイとして村ごと燃やし尽くすことを決定。9月16日午前、日本軍は平頂山村を包囲し村中の家屋を燃やし、武器を持たない老若男女を惨殺。惨殺された村民は合計で3000人。虐殺を逃れた幸存者(生存者)は100人程度。

以下は、事件後の事実の説明です。

1951年撫順市は平頂山で公葬を行い、虐殺殉難者ら同胞を追悼。

1970年平頂山事件遺跡の発掘を開始。

1972年参加者が供養できる「遺骨館」が開館。

1988年平頂山惨案遺跡が全国重点文物保护单位に指定。

2004年同館が全国観光名所100選に登録。

2005年同館全国愛国主義教育規範基地として公布。

軍部が独断で戦線を拡大させる端緒

「九・一八」歴史博物館(瀋陽市)

瀋陽市は中華人民共和国遼寧省の省都です。瀋陽市の人口は800万人以上(その中、都市部人口600

万人以上)、東北地方の最大規模の都市で、東北地方の経済・文化・交通および商業の中心地です。北京から東北3省、朝鮮半島へ繋ぐ枢要地で、高速道路、高速鉄道・鉄道在来線が放射線状で密集しています。

私たちは、ハルピン市から瀋陽市への移動には、快適な高速鉄道を利用しました。インターネットでは「中国鉄道高速」で検索すると多くの高速鉄道があることが分かります。瀋陽から北京への移動は高速道路でした。中国の高速道路の「総延長は世界最長」とネットにはありますが、日本と同様の快適さ(渋滞も同様)でした。

「九・一八」歴史博物館

「九・一八」歴史博物館は瀋陽市にある巨大な博物館です。市街地にあり大勢の中国の市民が見学に訪れていました。

「九・一八」とは、1931年9月18日に発生した瀋陽(旧「奉天」)に近い柳条湖で、南満州鉄道の線路の一部が爆破された柳条湖事件です。博物館は、事件現場のすぐ横に建設されたそうです。満州事変以降の「侵略」と「抗日戦争」の歴史が、ジオラマ等を多用した展示により描かれています。博物館入り口には、観光ガイドに掲載されている1931年9月18日のカレンダーの形をした旧館(現在は閉館)があります。

入口のホールの周囲の壁はすべて花崗岩のスラブで装飾され、起伏のある連続した白い山のレリーフがはめ込まれています。光の影響で、白い山が黒い大理石の地面に反射し、壁と地面が1つに統合されて、美しい豊かな北東川を象徴するホワイトマウンテンとブラックウォーターの壮大な景色となっています。

床の中央には、ピラミッド型の青銅色の鑄造物があり、上部には赤い宝石があり、反日戦争の14年を表す14のライトの照明の下で光っています。博物館の出口付近には中国残留孤児の像があり、孤児らの碑文があります。

展示は、中国東北部における反日戦争、東北復興、



そして侵略者の終焉、歴史からの教訓、平和への希望、日本軍国主義の復活への警戒で構成されているようです。500以上の資料、19の大小のシーン、4つの彫刻群、20を超える油絵と中国絵画、3つの大画面投影プレゼンテーションシステム、10のコンピュータータッチスクリーン、2つの電子伝言板などを見学者に提供しています。

また、柳条湖事件の首謀者として石原莞爾などの多くの日本軍に関する資料や、当時の日本軍の小火器、携行品も展示されています。それらの資料は下記で見ることができます。

<http://www.918museum.org.cn/>

柳条湖事件（満州事変）と日中戦争

柳条湖事件は、1931年9月18日に発生した瀋陽（旧「奉天」）に近い柳条湖で、南満州鉄道の線路の一部が爆破された事件です。この事件は関東軍参謀の石原莞爾らによって、周到に準備された作戦が実行されました。

関東軍は、これを中国軍によるものとして軍事行動を開始し、一日で南満州の要衝である瀋陽、營口、長春など18都市を占領しました。9月21日、第2次若槻礼次郎内閣は、これを「事変」と見なすとの決定をしたうえで、9月24日「領土的欲望」を否定する、いわゆる「不拡大方針」を発表しました。

しかし、軍部は独断で朝鮮軍の旅団を満州へと越境させ、関東軍もまた満州への派兵を独断で行い戦線を拡大させていきました。そして、日中戦争へ突き進んでいったのです。

その後の、状況は日本の国立公文書館の資料では、次のように述べられています。

1932年に満州国を建国し、清朝最後の皇帝溥儀を執政に擁立します〔1934年に皇帝となります〕。国際連盟は、中国の訴えを受けて、リットン調査団を派遣し実状を調べ、満州国の否認を決議します。日本はこれを不満とし、国際連盟を脱退しました。

1937年7月、北京郊外の盧溝橋で、華北に駐屯していた日本軍と中国軍の衝突が起きました。これをきっかけに日中戦争（支那事変）が始まります。日本は戦線を拡大し、1937年12月に国民政府の首都であった南京を占領しました。南京攻略にあたっては、日本軍による多くの非戦闘員の殺害や略奪行為等がありました。

日本は南京を占領しましたが、蒋介石率いる国民政府を屈服させることには失敗しました。1938年1月に近衛文磨内閣総理大臣は「帝国政府ハ爾後国民政府ヲ対手（あいて）トセス」という声明を発表し、交渉による解決を打ち切る方針を示しました。

一方で、国民政府は重慶に首都を移し、いわゆる援蒋ルートを通じてアメリカやイギリスなどから援助を受けながら、日本との戦争を継続していきました（重慶国民政府）。

これを受け日本は、1940年3月、蒋介石に次ぐ地位にあった汪兆銘を重慶から脱出させ、南京に新たに国民政府を設立させました（汪兆銘政権）。

一方国内の状況ですが、これも国立公文書館の資料によると、1932年、急進的な青年将校らが、犬養毅内閣総理大臣を暗殺する5・15事件が起こり、政党内閣は終わりを告げました。1936年、陸軍の青年将校達が約1500人の兵を動かしてクーデターを執行し、首相官邸や陸軍省・警視庁などを占拠して、大蔵大臣など要人3名を殺害しました（2・26事件）。この事件はすぐに鎮圧されますが、軍部の発言力はさらに強まることになりました。事件の後、政治家は絶えずテロによる生命の危機にさらされることになり、陸海軍大臣を現役の軍人とする制度を楯にして、軍が組閣を左右するようになっていきます。

若い世代に引き継ぐこと

さて、最後になりますが、村山談話の「植民地支配と侵略によって、多くの国々、とりわけアジア諸国の人々に対して多大の損害と苦痛を与え」たことに対する「痛切な反省」と「心からのお詫びの気持ち」は日本人全体が共有しなくてはならないと考えます。私は一人でも多くの若者に隣国である中国を訪問し、中国の人々と平和のための交流を行うよう希望しています。

なお、今回の平和の旅では、訪問先の中国記念館



瀋陽市内に残る日本戦犯軍事法廷施設跡

などで日本軍の侵略による犠牲者の方々に千羽鶴を捧げてきました。私が持参した千羽鶴は、文京区の被爆者の方々と毎年文京区で開催している丸木美術館の「原爆の図」展（主催 原爆の図を見る会・文京）にご協力頂いた方々が折ってくださった千羽鶴です。改めて関係者の皆様にお礼申し上げます。

（NPO法人東京福祉・まちづくりネット代表理事）

次世代への正確な発信こそ、私たちの責務

楠本 昭夫

三光作戦の背景

華北分離＝「満州国拡大版」工作

関東軍は1931年の満州事変（9・18事変）を契機に、翌年「満州国」を「建国」しましたが、反日運動が強まり、労働力不足などによる「満州国」経済の不振もあって、さらなる権益拡大が必要だと考えました。そこで、「満州国」に隣接する華北5省の河北省・察哈爾（チャハル）省・綏遠省・山西省・山東省を中国政府から分離し、日本が傀儡政権で実質支配する「満州国の拡大版」作りを画策しました。この地域は黄河流域及び北平（北京）も含まれ、中国の中枢部です。さらに、隣接する熱河省を「満州国の予定領域」と称して、1933年1月から3月にかけて「熱河作戦」を展開、山海関を占領し、万里の長城を越えて「中国本土」に迫りました。

蒋介石は、対共産党作戦を優先していましたが、日本軍の進撃を止めるため、1933年5月に満州事変の停戦協定として塘沽停戦協定（塘沽は天津近郊の地名）を結び、日本軍を長城線まで退けると同時に、中国軍も撤退し非武装地帯を設定しました。しかし、これは、中国が「満州国」の存在と日本の東北三省及び熱河省の占領を事実上黙認し、さらに河北省19県の統治権を喪失することを意味していました。

日本軍は、一連の軍事行動をこの協定で一旦停止しましたが、非武装化した地域を、関東軍とは別に1900年の義和団事件（北清事変）時の北京議定書で北京に駐留が認められた支那駐屯軍の支配下におき、中国本土への進出拠点とすべく、華北分離工作を進めました。1935年の梅津・何応欽協定（中国軍は華北から撤退、抗日運動はすべて禁止）の強要で、華北から中国軍を排除することに成功した日本は、1935年11月、華北5省に、日本留学経験のある殷汝耕を代表とする「冀東防共自治政府」（冀は河北省の別称）を樹立させました（後に「冀東自治政府」と改称）。南京の国民政府から離脱する声明を出し、22県・人口約600万が参加する「自治政府」を名乗りましたが、実態は日本軍の「以華治華」（中国人に中国人を支配させる）政策に基づく傀儡政権そのものでした。冀東の人民は、日本語の強制・中国人出入禁止の「無人区」設置による追い出しと「集団部落」における強制労働・慰安婦への強制などのファッショ的支配により、苦難に満ちた非人間的な生活に陥りました。

国民政府側では、日本に妥協することでその進出を抑える親日派（漢奸）が現れ、1935年12月宋哲元が「冀察政務委員会」を設立しました。これは国民政府側が設置した河北省（冀）とチャハル省（察）を統治する機関ですが、その委員は支那駐屯軍の了承で選ばれる「親日政権を装った特別の（完全な日本の傀儡政権よりはましな）統治機関」でした。

傀儡「冀東自治政府」へ抵抗する人民

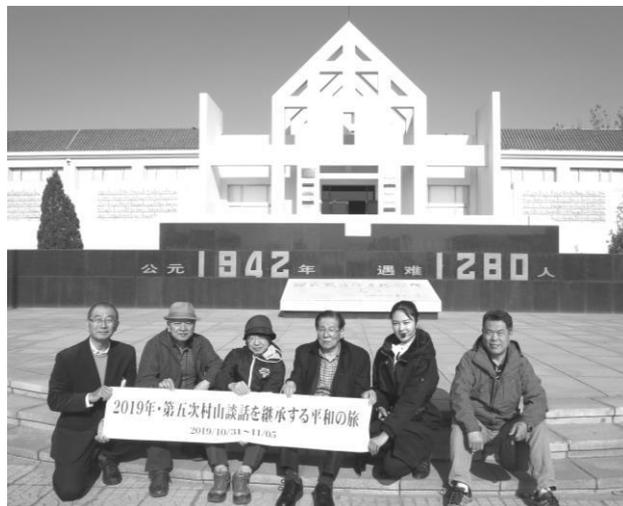
これに対し、北京の学生を中心とした抗議運動（12・9学生運動）が起きました。すでに8・1宣言で抗日民族統一戦線結成を呼びかけていた中国共産党の指導で、運動は全国に広がり、「日本帝国主義打倒」「梅津・何応欽協定廃棄」「冀察政務委員会反対」のスローガンが掲げられました。

一方、日本国内では、抗日運動の高まりに対し、「驕慢な中国」から「満蒙権益」を守るため「膺懲」（こらしめること）が必要だという世論が強まり、それに応えるという口実で、関東軍及び支那派遣軍は軍事行動のチャンスをうかがい、1937年の盧溝橋事件を機に日中戦争へと突入していきました。

中国共産党は全国に抗日奮起を呼びかけ、とりわけ冀東に日本軍後方のゲリラ戦を展開するための人材を集中しましたが、ついに1938年7月、約20万人が参加した冀東抗日大暴動が起きました。それに対応して、日本軍は「治安強化」の号令のもと、「殺し・焼き・奪い尽くす」三光作戦を実行したのです。

千人抗で叫び続ける遺骨

潘家戴庄虐殺事件



研修3日目、河北省内に多数保存されている三光作戦遺跡のうち2か所で研修しました。唐山市内のホテルを朝8時に専用車で出発し、工場地帯を抜け郊外の平原をひたすら東へ、潘家戴庄惨案紀念館(虐殺事件紀念館)はごく普通の農村地帯にありました。



この墓石の下には今なお潘家戴庄の犠牲者が眠る

1952年、千人抗の上に潘家戴庄惨案紀念碑が建てられ、数度の改修を経て、1998年に敷地面積7300㎡・建築面積2256㎡の現紀念館が完成、「河北省重要文化財」として位置づけられ、「全国愛国主義教育基地」として活用されています。

その潘家戴庄虐殺事件は、1942年12月5日に起きました。すでに、潘家峪虐殺事件(後述)をはじめ各地で三光作戦を展開していた日本軍ですが、八路軍をかくまったという名目で、平和に暮らす370戸・約1700人の村人を、広場に一人ずつ引きずり出して集め、自分達に掘らせた穴(千人抗)の中で老若男女1280人を虐殺(一家全員死亡は35世帯)し、すべての財物を根こそぎ略奪し、700年を超す歴史を持つ穏やかな村全体を焼き尽くしました。犠牲者のうち63人は妊婦で、動きが遅いと罵り、銃剣で腹を突き刺し抗に落とされたと言われています。

遺骨陳列館では、長さ45.9m・幅5.5~6.2m・発掘面積103㎡の千人抗の中に、成人9体(男7女2)、未成年12体の合計21体の遺骨が、虐殺時のまま保存陳列されています。頭のない遺骨・子供を抱いている遺骨・妊婦や乳幼児の遺骨・鈍器で殴打された遺骨・刀剣で足を切断された遺骨・焼かれ埋められた遺骨等が、虐殺時の苦しさ・悲しみ・怒りを叫び続けています。「平頂山惨案紀念館」と同様に、坑内に直接保存され事実を後世に突きつける遺骨の迫力に圧倒されました。

全ての遺骨を掘り出せず、未発掘の遺骨もまだ相当数あるとのことでした。身元の分からない約200人の遺骨は合葬墓に埋葬されましたが、遺骨の正確な数は分からないので、422人の生存者の証言等により、それらの数字を把握したとのこと。その他多くの証拠物件が保存され、1280人の名前が大理石に刻まれています。生存者の証言も展示してあり

ますが、現在何人生存しておられるか確認できないとのことでした。残念ながら、今回生存者の証言はいただけませんでした。

大虐殺を命令した第27歩兵団団長・駐唐山地区司令官鈴木啓久が、自らの罪悪を認め謝罪し、1956年の特別軍事法廷で有期徒刑20年の刑を受けた裁判記録と共に、日本の平和団体・個人が多数訪問し生存者の証言に聞き入る姿も、日中友好の証として紹介されていました。

最後に紀念館ガイドの女性へお礼を言い、原爆資料館のパンフレットを手渡し、「広島を知っていますか?」と聞くと、「広島・長崎への原爆投下は良く知っている。」と答えてくれたので、「広島・長崎の地獄が繰り返されないよう、私達は日本で活動しています。平和のために共に頑張りましょう。」と伝えました。彼女は、お返しにと「歴史遺跡が未来を明示する」と題した小中学生の紀念館見学感想文集を渡してくれました。文集には、次世代が事実を継承し、逞しく生きようとする意志が溢れていました。



ヒロシマの資料を説明員へ渡す

「小さな桃源郷」での虐殺

潘家峪惨案

午後の研修地へ向かう農道の途中、自動車同士の衝突事故に遭遇しました。狭い道路を2台の車が塞ぎ、運転手同士が言い争っているようでした。やむを得ず進路を変更し、ますます狭く凹凸の激しい農道をしばらく彷徨いましたが、そのおかげで、通常なかなに見られない農村の家屋や庭の風景を間近で楽しむことができ、収穫したトウモロコシのむき出しの梱包、むいた皮の山など、生活の匂いを間近で感じることができました。

昼食後、唐山から高速道路を北へ走り、ようやく谷あいの山村にある潘家峪惨案紀念館(虐殺事件紀念館)に着きました。開館日にもかかわらず入口の門が閉ざされており、連絡を取りやと担当者が来て開門してくれました。四方を山で囲まれたのんびりした桃源郷のような小さな集落でしたので、紀念館の参観者もあまりいないのかなと思いましたが、後から多くの参観者が入ってきました。

1965年に潘家峪階級教育展覽館として開設され、1976年に潘家峪革命紀念館に改組、そして河北省・唐山市・豊潤県の協力で、敷地面積2362㎡・建築面積1246㎡の現紀念館が1999年に完成、「河北省重要



山あいの長閑な潘家峪。ここで殺戮があった

文化財」に位置づけられ、「全国愛国主義教育基地」などとして活用され、年間 20 数万人が歴史を学ぶ施設であるとの説明があり納得しました。

日本軍の刀剣・銃・水筒・飯盒や犠牲者の生活道具などの証拠物件と共に、虐殺現場の写真、当日を再現したジオラマなどが展示されており、惨劇を実感できるように工夫されていました。

殺し・焼き・奪い尽くす

事件の概要は説明パネルによると次のとおりです。

「1938 年 7 月の冀東抗日大暴動へ、潘家峪村の青年は積極的に参加しました。その後、党・政府・解放軍の指導機関が潘家峪村に移転、新聞社・後方病院・地下刑務所・兵器工場・被服工場など各種抗日大衆組織が村内に創立され、潘家峪村は冀東抗日活動の中心となり、八路軍に協力して日本軍に打撃を与えました。

日本軍はそれを敵視し、潘家峪村で 138 回の八路軍掃討作戦を傀儡政権軍を使って展開していましたが、『血で洗う』ことを言明した日本軍は、ついに 1941 年 1 月 25 日、1600 人を超える傀儡政権軍に周囲を固めさせ、3000 人超で早朝村に入りました。村人に西大抗へ集まるよう指示し追い立てましたが、歩みの遅い老婆を刺殺したのをはじめ、少女や母親への乱暴・強姦後の刺殺など女性蔑視の限りを尽くしました。長さ 30m・幅 10m・深さ 2m 弱の西大抗は、夏には水が湛えられていますが、当日は底に氷が張り、芝や草が敷き詰められていました。そして、銃剣を構え殺気立つ日本軍がぐるりと囲んでいました。午前 10 時頃、駐豊潤県日本軍責任者佐々木二郎は、集まった約 1000 人の村人に「大日本皇軍は、『王道楽土』を創りお前達を助けるために中国に来た。皇軍に感謝しないのはなぜだ？『共存共栄』は良くないのか？なぜ八路軍を助ける？八路軍はお前達を助けない！八路軍はもうすぐ皇軍により消滅する！」と訓話し、八路軍の行方を自白するよう迫りました。村人達は沈黙を通したので、佐々木二郎は前後の見境なく怒って、「病気の者もすべて一人残らず潘家大院に連れて来い。さもなくば、皆殺しだ。」

と命令しました。西大抗に集まっていた村人も、より広い地主の邸宅・潘家大院に追い込まれました。殺人場として準備された状況を察知した村人もいましたが、多くの村人は「なぜ、丸腰の善良なる私達を殺すのか？」と半信半疑でした。午前 11 時頃、ほとんどの村人が集まったのを見計らって、日本軍の銃剣刺殺が開始され、村人達が叫び・罵りながら反抗し逃げまどう騒乱状態を見た佐々木二郎は、機銃掃射を命じ、血の海となりました。さらに、敷き詰められた芝や草に石油をかけ火をつけて、逃げる村人へは手榴弾を投げつけ、追いかけて銃剣刺殺しました。約 1700 人の村人のうち、0 歳から 80 歳までの 1230 人（男 315・女 352・子ども 563）を虐殺、一家全員死亡は 33 世帯に及びましたが、八路軍は一人もいませんでした。また、すべての財物を根こそぎ略奪し、約 1300 戸を焼却しました。桃源郷は一日で焦土となり廃墟と化しました。

冀東解放軍は事件 3 日後に現地入りし、大虐殺事件現場を写真撮影し犯罪を記録しました。また、生存者の治療・看護にあたるとともに、見分けのつかない犠牲者の遺骨を集め埋葬し哀悼を捧げました。



上：潘家峪革命記念館にある惨状模様のジオラマ。
下：村には「日軍臨時指揮部」の看板が残る家屋が保存されていた。



幸存した 470 人のうち約 200 人は村外に避難しましたが、197 人は村内に残り、家を焼かれ親族を失い食料もない困難な状況の中でも悲痛に耐えました。そして 27 人の青年が、1941 年 3 月、親族の恨みを

晴らすために『報復団』を組織し抗日闘争を継続、1942年7月には八路軍と共に責任者佐々木二郎を撃殺するなど、終戦まで150数回戦闘に参加し、抗日戦線の中で重要な活躍をしました。その功績の中から、後に中国人民解放軍幹部に昇進した人物や全人代表委員に選出された人物も輩出しています。」

「前事不忘・后事之師」

戦後の友好の証として、日本の平和友好団体・個人が記念館を訪問し、証言を聴取している写真が数枚展示してありました。その中に、私達（IFCC）の以前の旅行団が訪問した写真もあり、「小さな友好の一步」を継続することの意義を再確認しました。

記念館の最後には、「まとめ」として「前事不忘、后事之師」から始まる次の言葉で締めくくられていました。「過去を忘れないことが、将来の戒めとなります。永遠にあの屈辱の歴史を忘れてはいけません。潘家峪大虐殺事件は、日本帝国主義が中国を侵略し

人類の文明を踏みつけた動かせざる証拠です。日本のファシストが潘家峪の無辜の民を虐殺した事実は、疑うことも抹殺もできない真実です。血と涙で固まった歴史は、私達に『立ち遅れると打たれる、自ら才能を発展させ強くなれ』と教えています。特色ある中国の社会主義を旗幟高く掲げ、歴史を心に刻み、国恥を忘れず、前進向上を怠らず、中華民族の偉大な復興という夢の実現に向け奮闘努力しよう。」



「焼き尽す」を逃れた「不忘」老樹が残されている。

現在、潘家峪村は450戸余・人口約1500人の「葡萄で有名な安定した山村」へと回復しています。2016年6月には生存者が30人生きておられましたが、現在は約10人だろうとのことでした。残念ながら、今回生存者の証言はいただけませんでした。

記念館の周囲では、子どもから高齢者まで村人達が集い、葡萄をはじめとする食料品・日用品の青空市場を開いて、和やかな雰囲気に包まれていました。

しかし、西大抗・潘家大院・銃剣で刺した痕跡が残る小鉄門・佐々木二郎がお茶を飲んでいて日本軍臨時指揮所・29人が隠れ奇跡的に助かった小屋・虐殺現場で焼かれながらも翌年新芽を出し今も生きる



「歴史の生き証人」たる樹齢600年の老槐樹等の保存された虐殺遺跡が悲劇を「証言」してくれました。静かな谷あいに響く阿鼻叫喚が聞こえるようでした。

日中両国人民の悲痛を共有

記念館・遺跡ガイドの青年へお礼を言い、原爆資料館のパンフレットを手渡し、「広島・長崎の無垢の人民も地獄の中で虐殺されました。潘家峪の皆さん方の悲痛な叫びを、広島・長崎、そして多くの日本国民は共有できます。絶対に戦争が起こらないよう、共に頑張りましょう。」と伝えました。彼は、「少し待って!」と言って小走りに事務所へ向かい、「潘家峪抗日闘争記実」という冊子を持って来て渡してくれました。気持ちが通じ合えたと思える瞬間でした。

その後、「抗米援朝、アメリカ帝国主義・新武装日本反対」運動が展開されていた1951年に、唐山市人民政府有志により建設された「潘家峪死難同胞記念塔」、1952年建設の4つの墓と「潘家峪惨案遇難同胞陵园記念碑」を訪れ、折鶴を献納しました。

次世代への正確な発信こそ、私たちの責務

「前事不忘・后事之師」の格言を各所で見ました。そのためには、事実を解明し、貴重な証言と共に継承し、次世代へ正確に発信しなければなりません。それは被害者の側以上に、加害者の側に必要であり、現在を生きる私達の責務だと決意を新たにしました。

(広島県)

— 普通の市民が意見交換できる場を —

飯沼 秀雄

意見交換の対応していただいた中国側研究者
高士華 研究員（抗日戦争研究）主編 中国抗日戦争史学会 秘書長
履歴 1995年東京大学に留学し、その後、仙台の東北文化学園大学で教鞭をとり、合わせて17年間日本で学び2012年に帰国。渡日前に8年間、同研究室に所属。帰国後2013年から「抗日戦争研究」誌の編集長。

教科書問題

（訪問団：私たちは日中戦争の歴史を忘れないために学んでいますが、私たちは研究者でなく活動家です。日中間の現在の政治課題について意見交換したいと思います。教科書問題では政府レベルでどのような状況になっているか、その点も教えていただければと思います。）



話を伺った高士華・中国抗日戦争史学会秘書長

——高氏：研究は学術的には中国では日中戦争について研究されているが民間レベルでは最近では10月12日、13日の予定で行く予定でしたが台風の影響で13日のみで早稲田大学でシンポジウムを開催しました。2億5千万円かかるおおきなプロジェクトを予定している。研究班は3班参加している。日中戦争を研究することは当然価値あるものです。

今日の情勢は皆さんと同意できる意見かと思いますが私たちは学術の面で研究していきます。最近報道されている事ですが北海道大学の村上教授から学術だけでは出来ないのでは無いと言われていた。日本に13年間いた経験から日本の研究者と一緒に学術的な日中戦争の研究をしたほうが良いかなと思っています。

町の本屋に行くと歴史的事実でない本や雑誌が販売されている。日中国交回復前、周恩来氏は歴史的事実を重視していたが国交回復後は日本政府は重視していない。

過去の歴史認識について皆さんの努力は例え一人でも多く歴史認識を学ぶということは大変だけれども大切な重要なこと。

私は雑誌を編集しているが実際は日中戦争がなぜ起きたのか究明されていないのではないかと考えているシンポジウムには7人参加して中国人4人院生、40

歳以下の日本人3人が参加した。皆さんは頑張っていますが日本人の中に、東北大学で日中戦争について教えてきましたが若者は全く無関心ですね、今の日韓関係もそうですが、歴史認識について難しいと避けられる。以前は過去について関心があったが、今は日中友好活動をしているのは年配者が多い。

1995年に東大の寮に院生として3年間いました。

（団員：丁度、教科書問題で議論になっていた時ですね）

——歴史について国民全体でもなくても関心がありましたが、今の状況はそうではない。

（団員：最近の若者の多くは労働組合にも加入しないなど、社会的問題に関心が無いのは共通していると思います）

——仙台で3つの大学において非常勤で教えていました。東北大でも非常勤で教えていましたが自分の就職などには関心がありますが社会的問題、外の世界については無関心でした。頑張してほしいのに、失望したのは学生が授業を聞かないことです。外の世界、隣国に関心を持つのは日本の未来に関わるからですからね。2010年の東日本大震災前に学生6人連れて短期留学をした。現在の中国を見てよい面、悪い面を見てもらいたい、そして中国を判断してもらいたいと。

中国は理想の地でもないし、現実の中国を見ないと日中関係も理解出来ないのでは無いのか。若い人は出版物やマスメディアの影響が大きいのではないのでしょうか。

若者と歴史

（団員：若い人の傾向で日本では新聞も読まない、ニュースも見ない、ただスマホの無料配信ニュースを見るだけという偏りがある。法政大学の山口教授は嘆いていますが、社会問題に興味を示さない、政権に批判的なゼミには学生が集まらないと言っています。私は東洋大学のOBで社会保障制度講座を持って講義しましたが、提出されたレポートに「なぜ、政府批判をするのか」という内容の物が在ります。問題点や足り無いものを指摘すると、政府の批判に聞こえるようです。情報が政府与党に限られているので行政の問題点を指摘すると政府に批判的になると思われているのではないかと）

——中国は改革開放して数年経ち建国70周年になりますが、まだまだ、改革開放が必要ではないかと指摘する人がいます。日本の場合も明治から150余年経ちますが、日本は「反省」が無いのもう一度、日本の改革

開放が必要ではないかと思えます。これから日本の若者の未来、日本の国内問題はいろいろ在るのではないか。

改革開放の日中の共同研究をして改革していかないとけないのでは。

現在の安倍自民政権のもとで大学での研究への助成金が減少している。わたしは日本の国は好きだから、正常な関係については外からの批判、「侵略をしない国」としての在り方など指摘が必要ではないかと思えます。国の為にもいろいろ外部から聞いたほうがいい。中国も同じような問題に直面しているが。

(団員：最近、東大の加藤陽子先生の本を頂きました。彼女も若者の意識をどうしようか整理中とのこと。

日中戦争の学習で高校生、中学生に蘆溝橋事件やリットン調査団等について皆さんだったらどう考えるかという問題提起しています。

学生の意識を集約し調査を纏めた本を学生に読んでもらいたい。一つ一つの事件について、その時に日本はどの様にすべきだったか、と若者に考えさせる視点でまとめたものです。このような態度が必要だと私は思います)

——加藤先生はうちの雑誌にも投稿されています。やっぱりその時代は正常ではない、明治維新からの歴史は二つに分けたほうがいいと思えます。

近代化を進めて今日の近代国家日本がある一方、外の世界に向かって進出、侵略を軍が進めたという歴史。「国益だった」という言い方がありますが軍人のグループの利益、軍益ではなかったか？そのような状況で戦争になり、日中戦争もそういうことではないか。中国側から見て戦争の歴史は偶発だったでしょうか？偶然ということとは納得できないですね。

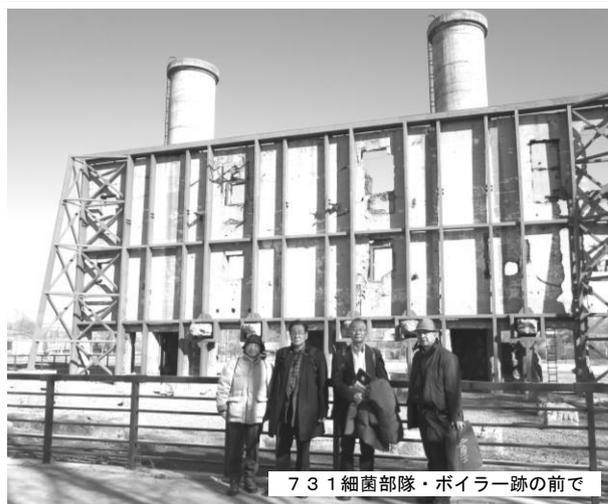
一つ一つの事件は偶然ですが日本の軍隊が主導的に起こした事です。満州事変も蘆溝橋事件もそうです。戦争を続けるかどうか、日本軍が主導権を持っていた。

日中共同の歴史研究をしたが、民間の交流を深めて若者に影響を与えることが大切ですが、今の状況は心配です。

(団員：東京都文京区で被爆者の会として、丸木俊さんの原爆の絵の展示会を18年開催しています。その被爆者の会の皆さんが作った折鶴を中国に持参してきました。このような活動にも若者は集まらない、被爆者は死ぬまで訴えるほかない。

現在、被爆者は80歳を超える年齢だが被爆の歴史とともに加害の歴史についても認識を共有しています。

多くの皆さんに見せることが大切と、今年、原爆の図の展示をしたら中学生や高校生も来てくれた。このような事を大切にしたい。来年は区内の公立学



校の生徒に呼びかけのチラシを届けて、親と一緒に来てもらうことを検討している)

——観察していると皆さんも努力しているが大変ですね。日本の国民の間に変な風潮が広がっているように思われます。外から見ていると皆さんの運動が少数派ですよ。大変ですけどもっと多く広く若者に参加して頂いて貰う事が必要ですね。失望することはない、これからどうするかです。

事実を追求することが大切です。日中国交回復する前の状態よりは今のほうがいいのではないか、

今は右に傾いていると言われるが、たぶん日本だけではなく東アジア全体に言えるのではないか。

——日本の場合は二つ考えられる、その第一は、無関心をどうするか？という問題です。日本の課題は中国でも報道されている、若者が就職をしない、結婚もしない、日本の未来が無いのではないか。第二の問題は日本社会の全体が右に傾いているのでは無いかという事が心配です。皆さんの取り組みで阻止していると思いますが、運動が無ければ、そのまま(右傾化)に行ってしまう。

ドイツの編集者と議論している際に、ヨーロッパの人々も日本の右傾化について心配していると言われました。

(団員：1990年代から南京事件や従軍慰安婦の問題を否定する動きが続き、マスコミも報道することを委縮してきています。これは戦前にもあったことで戦前の軍部にマスコミが忖度して事前に軍部の機嫌を損なわない様に検閲している、現在の日本も同じようになってきているなど思い深刻です)

(団員：広島の高校で教員をしていましたが退職してボランティアで平和公園の日めぐりガイドをしています。全国から小学生、中学生が訪れてきます。外国人も多いですが、そこに展望があるのですが、いまガイドの被爆者は高齢化して難しいので、若いガイドに研修を受けさせています。

今や広島平和公園は観光化しています。観光協会が研修していますのでそこには反戦や帝国主義戦争



中国社会科学院近代史研究所會議室で (2019/11/4)

反対、日中友好も無い。核兵器廃絶が辛うじて語られるが核兵器禁止条約を批准しない政府はおかしいとまでは言わない。私は加害の歴史、軍事都市として広島の子品港から日露戦争の軍が出撃していったことなど、欧米列強から日本が圧力を受けていたことを、今度は日本が近隣の朝鮮、中国に対して侵略していった歴史を踏まえる必要を感じます。広島の被爆は侵略の加害と被害の歴史であったと言えます。そういう歴史を踏まえて広島のガイド案内をしています。そういう事をもっと広島の人間は広めないといけないと思います。

もう一つは大久野島です、先生も御存じだと思いますが、ここにも修学旅行で学生が来ますが少ないです。今は「うさぎ」で有名な観光地で、加害の施設も有るのですが素通りしていきます。広島に来た以上平和公園と大久野島を見ないといけないと案内しています。

東京はA学園、名古屋のK学園を案内しました。私立学校は来ますが、公立がなかなか来てくれない。大久野島で毒ガスを作り、中国で使ったという加害に心痛めなければと、被爆者団体の方と旧日本銀行前で展示会をしています。

海外の学生の案内を先日しました、中国の学生の感想は、「日本は戦争への反省が足りないですね」と言われた。私は説明しましたが他のガイドはそれは別の問題で、今日のガイドの趣旨とは異なると説明していた。これでは中国の学生には判らない)

——広島大学で日中関係の研究をしている先生が二人いますので広島でシンポジウム開催を呼びかけましたが断られました。二人とも日中関係の近現代史を研究しているのですが、もちろん今でも交流はあります。

前は中国政府として8月6日の記念式典に参加してこなかったが、その理由は政治的に利用されるということで参加しませんでした。しかし今は参加していますし、中国人も広島で被爆している。

被爆

(団員：朝鮮人は5万人、南アジアのマレーシア、ブルネイ、インドネシアから大東亜共栄圏として9名来ており被爆している、当時の汪兆銘・南京政府からも留学生が来ているのでたぶん中国の方も被爆しているのではないかと。アメリカ人の捕虜も被爆して

亡くなっている)

(団員：広島では14名、長崎の中華街の方も被爆し中国に帰っている)

(団員：問題は権力者によって情報が知らされていない、広島の大久野島も戦争中も戦後も知らされず、毒ガスを作って中国で使用されたという事実が明らかになると裁かれ死刑になると言われ隠していた。広島の被爆者も被爆して差別されて生きてきた)

——中国人も朝鮮人も被爆している、人類全体の課題です。

人類は馬鹿だと思います。1914年から1918年に第一次世界大戦があり1937年から1945年の第二次世界大戦まで、時間が経って無いのになぜ戦争をしたか？大勢の人が亡くなっている。「ヒロシマ」は人類全体の問題です。東京裁判で日本人が裁かれたという問題だけでなく、再度、大規模な戦争が無いようにするにはどうしたら良いか、広島だけの長崎だけの問題ではなく人類全体の問題ですが、まだその認識が足りない。

政府間

(団員：政府レベルの歴史についての協議はどのような状況ですか)

——歴史協議は2回目ですが難しい。例えば政府間で南京事件について検証しようとするれば事実があつて虐殺の人数の違いがあるかも知れませんが、事実はあつたと政府間で共通認識されています。しかし日本の書店に並ぶ本に「南京事件の嘘」という主張がされているものがある。ドイツでは過去の事を否認することはできないが日本では過去の反省が無いこともある。日本は言論の自由と言われるが南京事件は日中間の政府レベルで結論が出ていることです。30万人死んだか10万人死んだかの意見のちがいはあつても嘘というのは言論の自由とは違うと思います。

(団員：南京事件の殺害した人数の違いから、事件その物を無いと政治問題化する右翼的主張がある)

——政府間レベルで歴史的事実について論争があつても議論することが大切です。

(団員：広島では平和教育研究所が韓国と共通の教科書造りを議論しているが中国との小中学校の共通教科書造りはまだやっていない。共通教科書ですが学校で使われていない、教材として利用している)

——高校の先生方と韓国と協議していても大変難しい、共通の認識にならない、民間レベルで日中韓の共通の教科書造りが必要です。三ヶ国の平和フォーラムを毎年開催していますがなかなか前に進まない。私が思うには日本の研究者には日本の明治維新からの歴史の中での日中戦争を学んでいただきたい。

今、私は大きなプロジェクトで選集を120冊出版し、つくばの防衛研究所で中国語を翻訳している。1億5千

万円かけている。

日中戦争について 2015 年に習近平主席になって日中戦争の研究に予算が付き研究している。今、私は 20 以上のプロジェクトで研究しており、その成果は全て公します。政府としての思惑とは別に研究は学術的なものです。その時日本では日中戦争で何があったのか理解できるのではと思います。

——歴史的事実について共同作業も必要ですね。中国政府としての考えはあるが、我々は学術面ばかりでなく、事実何があったのか日本の資料も中国の資料も必要ですが、取りあえず国として政治的に解決できるのではないかと、例えば慰安婦問題等です。

私が覚えているのは日本人の中南米への移民です。政府に騙されて移民した、70 数年経ちますがこれは政治的に解決するほかない。中国の問題点では昔、国民党軍に参加していた兵士のお金も問題です、これも政治的に解決するほかない。法律上は解決できないですから政府が政治的に解決しないとイケない。

今、日本と韓国との関係が悪化していますがこれは政治的に解決しないとイケないと思います。安倍政権では無理だと思いますが中国国内では戦争について日本政府と違う認識があるのですから、政府のレベル、民間のレベルで解決しないとイケない。難しいですが政府には民間から圧力をかけていく必要があります。皆さんの努力については尊敬します。

(団員：中国に捨てられ残された毒ガス処理については日本政府も努力していると言われていますが多くの日本国民はこの事実を知らないです。中国の受け止めはどのような認識ですか)

——中国でもほとんど知られていない。中国の東北部の狭い地域なので知られていないです。日本政府も恥なので大きく宣伝しない、宣伝すると右翼が騒ぐからでしょうね。日本の近代史は中国との近代史でもある、日



偽満州国を支えたアジア最大と言われる露天掘りの撫順単横の現在。平頂山事件跡はここに近接する。(2019/11/2)

撫順炭鉱は奉天(瀋陽)の東約 30 キロに位置する。その鉱区は東西 17 キロ、南北 44 キロ、面積 6000 万平方メートルにおよび、露天掘りと坑内掘りの両方があった。撫順炭鉱はもとも 1901 年に中国人により開発されたものだが、日露戦争勃発後、中東鉄道用石炭採掘のためロシア軍に占領された。日露戦争後は日露講和条約に基づき日本に引き継がれることとなり、南満洲鉄道株式会社がその経営に当たった。しかし、清国側は日露戦争中、ロシアに占領された経緯のある撫順炭鉱が日本に引き継がれることに反対し、1909 年 9 月 4 日の「満洲五案件に関する協約」調印まで紛争が続いた。同協約の第 3 条では、清国が撫順・煙台両炭鉱の日本による所有を認めること、日本は清国の主権を認め採炭に対し納税することなどが協定された。

国立公文書館・アジア歴史資料館 より

本に 17 年間いましたが、日本人は近代史については触れたがらない。日本人が興味を示すのは中国の古代史ですね。現実に関係ない西安(長安)などに興味を示す。

皆さんの努力で、普通の市民が意見交換できる場ができるようにできるといいですね。

団員一同：有難うございました。

(松戸労組会議副議長)

資料①

これまでの訪問・視察先内容

- 2015 年 7 月：南京大虐殺惨案跡及び記念館、三光作戦跡の河北・北垣村での幸存者証言聴取、冉莊地道戦遺跡、盧溝橋事件跡など視察。北京で中華全国青年連合会及び中国社会科学院と意見交換。
- 2016 年 11 月：ハルピンの 731 細菌部隊跡、撫順炭坑隣接の平頂山事件跡などを視察。
- 2017 年 7 月：日中戦争開戦となった盧溝橋事件 80 周年、日中正常化 45 周年として取組み、ハルピンの 731 細菌部隊跡及び幸存者証言、撫順・平頂山事件跡、9・18 事変及び張作霖爆破事件跡、中華全国青年連合会及び中国社会科学院との意見

交換。蘆溝橋事件跡及び抗日戦争記念館視察。

- 2018 年 5 月：無差別爆撃跡の重慶視察及び証言聴取、細菌兵器による攻撃実施地の義烏・金華の視察及び証言聴取、南京大虐殺惨案跡・記念館視察

行 程

10月31日 羽田⇒北京⇒ハルピン

崑崙大酒店泊

- ・出発が大幅に遅れたが北京着は予定時間と同じだった。
- ・乗り継ぎは荷物がハルピンでピックアップとのことで北京では国内線搭乗口へ移動。劉さんと出会う。今回本当にスムーズ。
- ・いつもの空港レストランで昼食としてラーメンを食す。
- ・ハルピン着も予定通り。
- ・旧知の房さんが出迎え。45分くらいでホテルに着く。この崑崙大酒店も何度も泊まったハルピン駅前にあるもの。就寝は25:00ごろ。

11月01日 ハルピン（平房区）⇒瀋陽

瀋陽金杯商務酒店泊

- ・0815 ホテル発で0910ごろ731部隊跡記念館に着く。さすがハルピンだ。気温は2〜3度くらいか。前回（2016年11月）来た時は初雪に見舞われたが、今回は気温が穏やかだ。
- ・0910〜0950 証言者から話を聞く。会館の応接室のようなところだ。金成民館長は出張で会えなかったが、電話で挨拶だけはした。
- ・1000〜1200 館視察、遺跡視察。2号棟跡、凍傷実験、鼠、ボイラー跡、毒ガスなど見学
- ・今回オリヅル献納場所は整備されていた。前回なかったので設置を提案した。オリヅル献納し黙とうする。
- ・昼食をハルピン市内へ戻る途中、餃子。
- ・その後、東北烈士記念館を見学、松花江、ロシア街、松花江を見学し1610にハルピン西駅着
- ・高速鉄道1703発で瀋陽に向かう。駅弁を買って早めの夕食だが旨くない。ごはんがけとても多い。
- ・やっぱり夜の車窓は味気ない。
- ・瀋陽西駅でこれもいつものガイド金さんに出迎えていただき旧市街のホテルに着く。瀋陽駅から近いようだ。
- ・体力ある参加者は夜探検に出かける。

11月02日 瀋陽⇒撫順⇒唐山

唐山恒豊大酒店

- ・0800 ホテル発で瀋陽駅前の古い建物群（儀満州国時代の日本の建物）を車窓見学し撫順に向かう。2016年11月に泊まった大和ホテル（現・遼寧賓館）を今回も眺め感慨深い。
- ・撫順炭鉱に0930着。2年前から見学場所が整備されているようだ。
- ・1130まで博物館見学、遺骨館見学、献花、オリヅル献納など行い博物館を後にする。
- ・1330〜1530 瀋陽市内で9・18事変記念館見学。
- ・日が落ちるのが早い。張作霖爆破原状跡はパスした。駅弁がおいしくないのでも乗車前に夕食をとる。また餃子だ



つたが、おいしいのだが続けてだと食が進まない。

- ・出発1時間前には瀋陽西駅に着いた。皆さん駅体験も忙しい。
- ・瀋陽から、高速鉄道で唐山へ移動（3h30）。唐山西駅着後ホテルへ。ホテルまで40分くらい要した。2340ホテル着。

11月03日 唐山（潘家戴庄、潘家峪）⇒北京

北京天壇飯店泊

- ・0800 ホテル発で、河北省の三光作戦跡視察へ
- ・潘家峪惨案記念館に0900着、1030まで説明員の案内で見学
- ・潘家峪へ向かう途中、事故車が道をふさぎ迂回をしたが畑道を通る羽目になりそこを脱出するのが難事だった。したがって、途中で昼食をとる。
- ・1330〜1530 潘家峪で現地ガイドの案内で記念館、惨案現場、慰霊塔など見学。谷間なので4時近になるとうす暗くなってきた。
- ・1600ごろ潘家峪出発し北京へ移動3h。北京着後、食事して2000に北京のホテル着。
- ・今回のホテルは天壇公園近くの北京天壇飯店

11月04日 北京

北京天壇飯店泊

- ・0830 ホテル発
- ・0900〜1030 社会科学院での意見交換。高士華・抗日戦争史学会秘書長が応対。
- ・1115〜1300 中青連・中国国際青年中心を表敬訪問し昼食に招待される。馬主任、洪桂梅副主任、王希宏部長らが参加いただいた。
- ・昼食後移動し1400〜1500 中日戦争発端の盧溝橋見学。今回は近接する「抗日戦争記念館」は月曜日のため見学できなかったが記念館のある宛平城跡も見学。
- ・盧溝橋見学後、天安門広場、デパートなど訪れ、夕食レストランへ。
- ・最後の夜は恒例のホテル部屋飲みで総評懇親。

11月05日 北京⇒羽田

- ・0600 ホテル発で前日仕入れた軽食を朝食代わりに食べながら空港へ。
- ・予定通りスルーガイドの劉さんと別れて出国手続きし、空路、帰国の途（羽田）へ
- ・12:50 羽田空港着

（記：IFCC 鎌田篤則）

資料②



上：1937年、中国侵略日本軍は「七七事変」（盧溝橋事件）を發動させ、中国の抗日軍は盧溝橋で全面的な抗戦の第1砲を打ち鳴らした。同年7月7日夜、盧溝橋で日本軍は中国の地方当局に通知せず中国の駐軍基地付近でいわゆる軍事演習を行い、日本軍兵士1人が失踪したと偽り、北平西南の宛平县城（現在の盧溝橋鎮）に捜査に踏み入ることを求めた。中国守軍はこの不合理な要求を拒否した。日本軍は中国駐軍に攻撃し、中国駐軍第29軍37師219団は反撃し頑なに抵抗した。「盧溝橋事件」は中華全民族による抗日戦争の開始である。中国人民は血を流し、苦しい戦いを経て1945年8月15日ようやく日本の無条件降伏によって民族解放戦争の大勝利を取めた。写真は日本軍に占領された盧溝橋。

「中国網日本語版（チャイナネット）」2014年7月7日より
右：盧溝橋の袂で宛平县城（現在の盧溝橋鎮）をバックにした訪問団。（2019/11/4）



【編纂記】

戦後70年を期して、あらためて「過去の事実と向き合う」活動を再開し、2015年の第一回は「村山談話を継承し2015年を日中友好年とする訪問団」として催行した。その意義を関係者と共有し2016年からも継続し5回目を数えた。参加者は少ないが、成果は大きいと思う。

最近、ある高名な学者の論文に触れた。戦後70年に際し発表された「安倍談話」の文脈を検証し、「村山談話」を踏襲していると結論付けている。国語の勉強時間ではあるまいし字面だけで判断を下すとは。「自分だけ、今だけ、フリだけ」の実際のアジア及び世界で果たしている「安倍様の行い」が「安倍談話」には付随しているのだ。「村山談話」とは似て非なるものだろう。だからこそ、村山談話を継承しなければならないと強く思う。

鎌田篤則（IFCC 理事長）

報告書

第五次 村山談話を継承する平和の旅

編纂：訪問団事務局

発行：IFCC 出版会

〒162-0801

東京都新宿区山吹町

333 辻ビル405

TEL03-3268-4387

FAX03-3268-6079

頒価：400円（送料込）

発行日：2020年2月8日